





序

定家々々余の山莊。あまゝ集りし百人一首ハ末世に
宝書として大扨臺に口號りまゝなり。近代百人
一詩と云書あり。又法眼千尋翻證のなむと集めて
百人一句と號せしむるも中興諸家百人一首
と云あり。又此後新撰百人一首と云書ハ出たり。予
つゝ思ふに新古人の只此詩を以てあつた。東逸の
身もあはれ面白く妙なり。祭句もはるばる是と云はれ
細事なり。人知る涼しく芝草閑の句ふゝと云はるる
本にあらざる。和歌祭句に云く。色面染めて歌詠百人
選と題せば。かゝる耳に妙なり。東逸各句教多
あはれ。も教訓と云ふなり。と斗と撰いそゝと

書記のいふ書は昔年既に知るべし風雅の道なり
なる中にも思ふ多き中名も知らず然るに此人
乞食の名もあがり玉簾流を雲の上人よりいふ
り都くあふと席上よりいふより又よきものなり
伏れ初可集りては漢人よりいふ載き多しゆ陽も
知る人又いふ是も賄ひて種のみ或る物を乞ふ族
名ありて是人あを撰むよりいふと歌句と美談す
れとい書中にもいふと面白き事なりといふこと
主陽の即ちいふり又人稱く似合ふ事多し
あり又漢安と文字もいふと漢安と附合も是も
見やうといふ事あり前記といふとそれといふ
物といふと前後混雜といふと書つて初めを

位ありて高位へ更ふ風雅の道と見ゆ

梅の枝より萩の風を吹く

しらしらと世に吹く

百人選目錄上卷

弟一

本所右宗公

弟二

院明院教學雲人師

弟三

水戸黄門先國郷

弟四

成信道筑

弟五

法眼不角翁

弟六

負作

弟七

活他

弟八

足立本門

弟九

故一

弟十

安慶對馬信友

弟十一

馬籠前馬

弟二

松永貞徳翁

弟三

芭蕉翁桃青

弟四

雪中庵嵐電

弟五

寶井具角

弟六

右門惟足

弟七

本國寺日達上人

弟八

永源園枕女

弟九

赤井宗書直後

弟十

不怨齋

弟十一

墨池堂尾海

弟十二

樓川

弟女三 上野 寒松院

弟女二 德川 廣智宗武

弟女七 德川 松平陸奥守宗村

弟女九 刑部次宗尹鄉

弟女 尾刈宗春卿

弟女三 二反 大谷鐵前守忠相

弟女二 二反 力丸

弟女七 讀人

弟女九 情隨院了碩和尚

弟女一 後多 松平右近守豐武元

弟女三 水玉

弟女六 松平左近守監素邑

弟女 乾升 後多

弟女六 獨步庵起波 加賀

弟女八 墨露

弟女 自左庵德他

弟女 舉月平砂

弟女 成盛 加多唐

弟女 大壯玄菖 加多唐

弟女 八郎 青城門人

弟女 羊素 加賀

弟女 千代 加賀

弟女 百里 加賀

弟女 本者庵老蘭

弟女七 進奏所成睦

弟女九 組練先令

弟女 蓮止 五色墨

弟女 水谷養仙院尼公

新編百人選上卷

第一

有徳院教皇宗公

清つゝ一國の司乃こゝも有り

めくぬぬ民くくくくくく

百人一首の巻終天智天皇秋の田乃所并地陽をわへ連代
清仁徳ありそ大所而右宗公此所派分後及不出一とく
柝は所分れをると又又宗修終くくく正徳六年四月晦將軍
家継公而他界くくくくく所世継をくくく所くくく
所老牛の評定の正徳六年二月也所代を清終せくく間も
くくく是則正徳六年二月也所代を清終せくく間も
くくく所腹の民百姓長成四年貢納はくくく流米此代實流

四年貞取之相御覽目錄とて金匱要略の行と老中
 中上其書村山勝子殿 伊老中 公方様より下事 恒例
 あり 依り 是成四季貞取覽目錄と伊老中を金相御覽
 書系公より下事 君是とす 古是代を沿繼く 間も
 なく未だ天下に秀民くろくは各と知れぬ改む何
 一國民百姓の爲く公を用ひ 事もなく 一がれ也也
 因く定むる秀民より 是成の年貞と御覧 欲く民の
 幸方忠恵とく 欲く事より下れぬ故より やり
 みの我々より 衆は是れつの 伊老中も 世より 代と
 沿繼く 伊老中民を授育する 若成はともるく 伊老中
 あり 之國の 伊老中の 甲斐も なく 伊老中 伊老中
 多く 伊老中 伊老中也 此君賢成事 伊老中 伊老中

第二

花洛—くも蓮の如きなり

此長歌凡負徳を初めハ寺院に於て連歌なり。詠諧と別なる時
宗通の始なり。禁裏にて天子人の号は向ふ。然して其見ハ
階下ニ膝ひし一旬の若葱甲乙とあり。一点二点より成る
高きく、或ると傍小有今ハ金蓮の、ナ々々新と折なすし
一点たり。水ハ一ツも点たる色ハみの深く。今ハ至て川邊と云
本姓金蓮と深くといへり。此時負徳ハ蓮の白と吟し

有り蓮を花の君とくなくくへるそふそふ牡丹を
 龍王といひ日本あつての磯と花王といひ天竺うそひ蓮を
 花王といひ花の清きまは上りそふ依り佛
 菩薩をそふそふ佛前又そ寺なりそふ有る
 力へ蓮と撥は皆人いそふれそふあへく婦へそふ
 房へそふ清き物の病と也来れ婦とあ歳来と
 説そふそふそふ法華經の文そふ蓮の事と述そふ
 撥と伊豆一圓そふ元三門松の幣そふそふ思多そふ
 そふ大は江戸城そふ歳末年紙の日右例そふ赤鯛そふ
 撥を捕そふそふ四間あり蓮を泥中そふ出そふ
 泥そふそふそふ花いそふそふ人そふ氏よりそふ月と
 そふそふいつれそふ田更野人の子そふそふ又宵そふ

江戸若菜京れ福東をそまるともは珍味縁入目と著し
十種者ほいとうふに成廢とそえを尋ぬまゝ山吹の水
呑百姓の娘とて親の難多と救ふ愛のあて本綿おの
苗素といつゝ、亮よりほき出―新造と育られ後
夫と押出つゝ天璋織綿の中より目と出ともあり
―育柄をそめふびんべいこゝばん愛いもあるんを
とるんせんとせられも皆是養育の信入なり士農
工商とともふ美蓮花の―心を持なり何りあゝ
たゝへ貢―くともいふ直るも是は貪―く
ま路の信ととも衣と著し―瓶の求害と著し人の中
めく―徳を脊負―と恥―か寸圍も叙の蓮と花
―そゆもん屋を流貴女や―田へるる

今もわが山林波濤の末より忠貞を子の夢にて知し

卷三

證明院學靈大師

あふとねきんをたの

名もふし
記都鳥一郎

是を傳候院殿家重公の御簾中より京都より下り此宮祿と
なりと果報つゝふくふく世を去るは可哀ハ一と病
濁田川を渡りしに歌ありとく感懐深く終叶
と云ふこと述懐の所あるを後年御不幸ありと
不吉に前表といひ一人とありとの文に可なりと
初めぬくの事あり此の御の如き雲のより遠と
空雲へ下り將軍の御簾中になくせりといひ一

送の多し本僕を馬喰と云ふ

是を中興の詠祖とせしむるの句あり。江別栗津巻
義仲も小纂あり。こゝ詠祖とて門人の建を石碑而
七拾余と云く及べり。けふは翁了せし所のわが詠祖の
柳翁とて村をてらる。百姓の降十次所と云者。生得と云者
うゝ。有り。喧嘩只編や。江別親村の介歌とてを成る
小曲や。ん。主。侍。教訓の多くや。これ。発句也。妻妾ハ
予。著せ。詠祖妙法集。あり。文。了。略。して。記。を
是。に。我。門。人。と。云。句。なり。本。僕。と。山。中。の。深。谷。と。云。く。嘆
な。い。人。と。云。わ。ら。ま。も。せ。次。る。も。吟。と。云。う。い。つ。

もれも様同く果を食うその一徳を以て
付る能く徳を極へ一人を以り天を降る徳を極め
底を破るこそ教あること也信く云ふ板抄の
湯とのつれぬ

弟又

水戸黄門光國卿

見よるを何の苦となさぬもの

あに薄なきものか

世に一通り能くするより水の流るは深しお
あつと何の苦もなくあつても多きす
苦勞は知れず是つひかりも薄くやせなく
常しきものなきものへは水は正しくと静し

それ沈むるに苦ありとも苦勞なくと
その中にも苦あり人を見よるに我身と
人の身と能くするに我身は多し人にも
身暑く人にも暑く思ひ我身はあて
の痛を知るといふ事にあふの痛さ
仁義と信と徳と歴史と見えたり
人をえよりかく水のよきと
ぬるものさる人といふと徳と
しては人といふものあり
唯一なり見よるに人といふもの
なすに苦あり水のよきと
まをりけり光國卿を以て家の口磨く

飛夢と云ふ。高橋の原典にて老を樂みり今平八と
 いふふとい後中仲のうらぐ先平八の孫石局の子
 高橋の原典よりして目おそい。石角江船の官より
 六月の事なり。以て雲をみる。石角小重子と江船は
 関係なく、南より女といふ源三位頼政惟とありひく
 世は源氏と云ふ。源三位と成り。四自分と云
 源氏と妙を源氏と云ふ。源氏と云ふ。源氏と云ふ
 戲をみても、源氏と云ふ。源氏と云ふ。源氏と云ふ

信ふを新くする

ひろむ秋也 初と心得

と漢進たを知らぬ所と於て實を我爲ふ
能くしむると思ひしを今に悟るしとて或時

石角伊豆は熱海へ湯治といふ。さうに宿のりや
と業成ると答へて一坪のかゝる家賃うて是貴殿ぢや
しうらぶの日はいふゆゑそのなほ得たけまぬ
毎あまた面密ひつらふ書と片垂れたるものなり
うり面密ひれもおなじくなくして腹中ごとく云々
ゆゑいまそなたよりしるべき事ハ答へるにその
人よりしるすその血細くまわらすべしとある
や、経典と出して

あのをひひくと云ふ孤子

と書くやれやうに經典と凡綱と括けて割る
ておろしやうに來ては妙と云へし 概之を案を

才其爪と書なれは爪と喰ふ利あつた身を
喰ふなり字は何れと耕作の作はたひけふ爪
小町に而て食ふと云ふなりとていふと云ふと
と狸とせふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
あつた身と砂なりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
あると我なりと古へ源頼朝は是れは狐の精と
怪なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
そり通ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
何方と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
氏康怪しと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
して云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
保る古への形柄のなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

へと中と云ふなり氏康と云ふなりと云ふなり

長いなり。ゆゑに云ふなりと云ふなり

あつた身なりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
氏康と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
功なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
の雲白と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
洲邊と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
悪神と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
又云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
あつた身なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

り肺通なりい句原金と云 肺書の表逆の句思ふに
多く表逆の立金脊小原と云 出ふと云ふ本の家と云
思ふと焚是則更売と云と者こや 同根同性と
云ふのハ禁なりふ有 綱と云のつと云ふ世中
親又不和成も有又兄弟不和心ふ 氏家知る
多ふく海くぬも云是云地く背と云て云居仁
事成是と云百人 二人云是云傷く云云
不室の科 同物とて同物と云ふ俗く血て
血を流す 浅る云ふ云云 中血脈の里安
る云云 天地く云云 人 間血脈の里安
ふ 傷の云云 云云 和漢の云云 云云
近く云 和漢云云 利隆云云 和漢の云云 和漢の云云

憐に云 和漢の云 利隆云 毒害なりと
志継知り 利隆云 云云 云云 食 云云
是と云て 又利隆云 兄の利隆の云云 云云
云云 毒ありと云 食と云 云云 云云
和漢云 兄の云 血を吐く 云云 云云
の云と云 云云 云云 云云 云云
云云 云云 中庸云 云云 云云 云云
云云 同根と云 云云 云云 云云 云云
云云 其角云 云云 云云 云云 云云
云云 云云 云云 云云 云云 云云
云云 云云 云云 云云 云云 云云
云云 云云 云云 云云 云云 云云

我あと思へるなり——傘の巻

借とのと思へるなり——かたわら

と口をききなり今更と傘の巻の巻の巻

第十一

未六條

本國寺日達上人

我庵を都より移し——室妻の巻

らるやふなり千の巻の巻

此師より日達上人碩學の功なり——法衣の巻
なれは比喩品の大宅とあられり——此世の巻
金銀珠玉を樓よりたぬの巻なり——室妻の巻

の巻なり人より移し——室妻の巻
るなり出家持斎の巻なり——戒女の巻
是と申すと云ふは室門の巻なり——出家の巻
今より人より移し——室妻の巻
日達上人碩學の功なり——法衣の巻
都より移し——室妻の巻
漢より移し——室妻の巻
本年日達上人の巻なり——室妻の巻
かけ法迷の巻なり——室妻の巻
室門の巻なり——室妻の巻

弟志

活徳

海の中れくのかげくみよ子

是を平し元日の吟也一年三百六十日のわがさか
雲一或る影ひ又き少くも或は寝立又いふふ西
るも何となくいついふもあり時と品とよとふと
春の目も顔もそく顔もきれ目もきくさのこ
中も平し元日といへるうい老もも若もも年立
らつて初まのふも門松を飾りてあつて庭の
の声も板双を鳴ふ又ふくもまた庭のわ
さつて年娘のまねやへる唐様喰振振やへる
父母妻子のきくを懐く人といひ日い少く顔も
ありと我人一年の毎月の毎日の顔もきく

らも若もきくもきくも何年年中の人
らもきくもきくもきくも何年年中の人
といへるうい老もも若もも年立
らつて初まのふも門松を飾りてあつて庭の
の声も板双を鳴ふ又ふくもまた庭のわ
さつて年娘のまねやへる唐様喰振振やへる
父母妻子のきくを懐く人といひ日い少く顔も
ありと我人一年の毎月の毎日の顔もきく

弟志

東祇園の魂

あまのいふをきくもきくもきくも

あまのいふをきくもきくもきくも

祇園の水菜玉の魂を女たりといへるもきくも
きくもきくもきくもきくもきくも
きくもきくもきくもきくもきくも
きくもきくもきくもきくもきくも

環を付箋と云ふかゝる法は著るる脱するは著る
くはのかゝる取常一節少く時明く日本と云
ふはなるなり

第十六

赤井圖書直綏

世の中乃限りて又よなるもの

君の
止る
の
を
そ
る
を
そ
る

世安を幸保す成永吉宗公の御舟らまてて思客の
とて中野へ移すの櫓を極させり今桃園とてなり
此櫓の盛の節櫓とて受方へしとて中野へ成る
たふく移く元安中へて櫓を去るゝなりとて
かく將軍れとてかく思客依の中櫓の影とて請ふ連

とくも千年と萬年とせし水ふあうともなり
まゐり百年とせしと君成程しては書き居てと書
けり忠言の諺を傳へし所を不例と云ふも然り
や一は書き居り心腹何通云地もあつて捨るも
さしとくも後年仙洞様四謝人々は彼をいふも
一は願せよと方あつても雲々の人々は耳と
て誰か多く候ふなり

中村五仕切陽者

第七

故一

あつた所はあつた所なり
松の森

是を深町中村五仕切陽者助と云ふ者の句なり是を
古歌といへば世の中はあつた所なり

この身はあつた所なりと云ふはあつた所なり
今い雷光石火也今と云ふはあつた所なり
人の死はあつた所の依りなりと云ふはあつた所の
してあつた所なりと云ふはあつた所の
い送るなりと云ふはあつた所の
我身の外もあつた所なりと云ふはあつた所の
是なりと云ふはあつた所の
と云ふはあつた所の
はあつた所の
是なりと云ふはあつた所の
あつた所なり

第十八

盲人

不怨齊

久之北堂之文在也

思ひ墨よりなぐし勝永の月

論語曰天とを恨む人をも咎めずといふ語は天
余に〜不辛小患つる人の心のまをわくや
を〜の病中病歎淵が不辛經余佛道するを
の宿業は〜といふ陽うて恨むを悪業なり
といふ大不辛に違ふ人をみな天余をわく人うて
天を恨む人と咎む事あるをやは不怨無を
聖丹砂の病中病儒者しく滋陽学多あり
中身の故何うてあるを〜病なりこれ眼疾さ
く〜と云ふなりが終に病眼と云ふ病なりと云ふ

不器毎も目くらめ目眩と云ふ——大器——さう
らにあらうといふ見へるとして眼の威も
心持もあて盲目といふやうに俗にめくらめくら
いふやうに、此やうなことをいふと、思ふ事も
いふ事も勝手なやうな面——この不器毎の事を
以て古くを知りし

第十九

雪れ日中 何事かあり

樽拾以

是を先年湯老平飯田節に終る。安氣對する位友の句
なり。前々歌せし「吾惟」等の句と同し。今この句は是も
淵明の「夕氣」ともよくいへり。雲を影を隱るる

朝寒風初のりく胆と通せん素足めて尻のけ
 ろく入あして四角いころをさへあかきつとく
 駕のりより脱して河邊可人のまゐるへ銀の海
 居あへ巨魁くけりく病とせん小舟公人の出
 へる夜のりよりあはれ雲中をいともと
 あるく不便さうと四懐をけ句也又江戸浅草の
 く西島と云くを主婦なりく詠詠を好め西島
 あふ夜雪いとみづく唄夕といへる者の方く詠詠
 小調市と依く連く出れんとせくと女房押あて
 あそり我子なと依くはとて花の雪といへり
 是より冠里君の句は裏也まゐる西島は小調市と依
 是より一人出れり感懐あふ句句也是より冠里

皮草履の鼻法をうへ田楽車と成ては下は板の
桐と云ふく佛并に刻も又琴と云ふく貴人等も
あつて下は板と云ふく板の下は板の半は同
物としてその半と別す。而しては、云ふと、是を
終つた也。是を、下は板と云ふく、中は、是を、
是を、是を、是を、是を、是を、是を、是を、
依此具員して生じて、是を、是を、是を、
わきく、わきく、わきく、わきく、わきく、
と、是を、是を、是を、是を、是を、
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
人、人、人、人、人、
子、親の許を出ると、娘は、是を、是を、
と、是を、是を、是を、是を、是を、

是、是、是、是、是、
この牛、牛、牛、牛、牛、
人、人、人、人、人、
あ、あ、あ、あ、あ、
娘、娘、娘、娘、娘、
是、是、是、是、是、
は、は、は、は、は、
そ、そ、そ、そ、そ、
れ、れ、れ、れ、れ、
而、而、而、而、而、
は、は、は、は、は、
馬、馬、馬、馬、馬、

母を中子と持て大親の恩を知らず若死せの中に
ありておぬ者あると云ふことあり親く孝と云ふこと
あり子に教ふ親く親ふあるを云ふ者あり子に
親の心を知らぬと云ふことあり子に親の心を知らぬと
十九年くあると云ふ者あり母の迷ふことあり父を
いつくとも無へ難く親の慈恵をのぞくことあり
思ひやうにおもふも早く親の恩に知らず親の人の体
よりのありの涙をなす

神田

第三十二

樓川

名月や床のうへに涙を流す言

是を江戸柳原云々下田田友成等の云ふ久松信房

さうさう宗通なり此人の云ふこと感懐多し
名月を世とて月のみをうたふと貴族ニ子
里の介とて濃なることとてや一庵士目
とてふ文く其樂は小床にけり妻妾ふと云
ふも月のみをうたふは目もあつたあつた
此の言はてくくあることとてふことなり
是世間の人の云ふこととありあつたこと
涙がけは苦勞もなう酒肴と耳に苦のそ
人を是にみるせんは本にさめめをそと胸を
ひの戯るに耳もさめめ酒をそと熱湯と
知て我面をれ人のこととて月をあつた
この物ありらぬうたふことありあつた

句
此
所
有

東觀山

第二十三

寒松院

皆人を神の如く成る家

みちある所のうへて世の年

此詠をたゞく、東嶽山神宮列南塞初降、宵を接現、
神宮へ参詣して宮敷く、延喜式く東照宮のいふ
このやうに敬を奉り神君を奉養の功擧せ給ひ、中書
を擧ぐせ給ひ、天下安撫の功と主格を、中書の功を
賜ふに、天子孫業荒と思ふに、あを、只一天、中書
義民の塗炭の苦を救ふに、この神仁堂の功を
是神佛の靈威なり、神皇正統記の文に、詠なり

月と初をなふ今海をのりて所々微禄して之の
本行はたなかりしやうくしるるやうなり
同く舟より洲原も出来ぬ知りあつゝ高の
得るもあつゝやうくお世をふく程ひるゝ
主人を立替りしつゝも新来者となりて出世の
一死をすも之の枝をわく神より回つゝ取立て
形よりゝ石のたふす年長よりゝ何れも
生来と嘆きあふ耳味ある竜角のそと
よく穿鑿をふるゝ古きなりゝ室も憂
ゝゝゝも憂きなりゝ娘もあつゝも同く
久きなりゝ戯言なりゝ新波病死の一箇日市人
種並買ひ傍ふなりゝ祥世と妙なりゝと云けり

祥世とを年長を位をきりゝ水の句に
祥世とを年長を位をきりゝ水の句に
うゝゝゝも白く若海へ舟より投る氷の
舟に水と波とあつゝ水へ又海へ投る
之の水とをわくゝも又死のそと
いゝゝゝも祥世と能くなり

第二十七

松平陸奥守宗村

世にその人位文字の玉章

と名なりゝ我を知らるゝ

世にその人位文字の玉章
と名なりゝ我を知らるゝ
石と雲ふる昔ありゝ松平実と云く石の面より

船ありて一 出ふ舟の帆風をひきのありて
逆風なり秋月輝揚 盜者帽其影をかりし月の
まへそふそ風船人を收へと盜賊ありといはれん
求仙を日向を好む秋海を日影を好む牡丹の作
のき百合をうづむいさるそ下り暮るのちふそ
遠きとくくあらはれそあらはれそとふふ
まはるくあらはれそ郭をまはるく父様の二徳の
世あらはれそあらはれそあらはれそあらはれそ
あらはれそあらはれそ

第五

大改

才九

名月や 我國西よりゆき

此方丸の今れ國十州の為るに祖父海老翁の流俗の
昨よりまの海を著始方といへり後より三井と改名
一又柏蓮といへる今れ國十州の長張三井と
いふいふ丸の句をまゝと日向あり我影移まへり
名月にはまゝあるれといふまゝあるれといふ國西の
何れにまゝ小移ふと月を賞美したる句あり
日月の影影を思ふといふ形影の影といふと
まゝといふやまゝといふ日影といふ國西のまゝ目ふ
まゝといふ目といふまゝといふまゝといふ人を教へ
金銀を棄てしれといふまゝといふまゝといふまゝ
まゝのまゝといふまゝといふまゝといふまゝといふ
まゝといふまゝといふまゝといふまゝといふまゝ

貪しき百姓の世後の苦を小細盗人せしむる
月のゆくある夜縁をいふせうなるわらふと
つゞく細へりち根ゆびのさみあるあを味
うへー 鈴くひのこせんにさるるあをとよとあれ
見くびさふとさるる平を片ち小聲をうへー
まかせんといふ又そのをりし理り極をつゞく
あへりちを片つゞくあをは是自然に天初と
者の口と信く中させあふふへーと今と
なせー悪業と悔と首とく相果ぬ書徑港範
篇くくふ其月ふーあをの鈴とく曲とく
新曲なるー陽震くは知是なり云知地知
我知人知なるふるー

金唐と船浪人

第五十六

人野玄著

酒と金唐のちとこれあふる
あふるにさるるあをのさるる

此人そ大和國郡山城にれ家来たるうー。主家断絶
の後浪とれ身とれり渴命とる及ひ道路より
此人とれりー。そ浪よりれさるるあををいさ
るるらるー。えより二君ははる志なりりー。あ
うかくとるるあををいさるるあををいさるる
とや終るるあ國橋の陰とくー。と食安とて倒死
なりとくあををいさるるあををいさるる
詩とれり

わくわく成人のわくわくなり。泥中れ蓮砂中の
黄金とを是なり。を以て砂金たるふも也。予れ
今其思ひ出せり。此人お呆一七日目小何人。勝を
れをまて言の詩を書きそむなり。

黄塵世路不名独歩往還方外情
借問此人何以是疑知胡蝶夢中生

弟三十八

浅草 八助

何り。やうく。ふ。人。新。か
我。身。を。う。つ。り。墨。を。金。を。せ。る。

是ハ浅草車番セリ。下ノ此人ナリ。ま。古。何。者。
知。事。を。知。る。せ。日。年。稿。の。下。り。あ。く。は。八。助。の。

小敷布と拾ひ。小中に金三拾あり。世の常。此
人。う。い。を。ん。信。ひ。早。速。に。金。を。持。く。逃。去。し。ま。
此。八。助。更。小。信。を。落。せ。し。人。を。呼。び。難。後。に。ま。し。
ま。と。や。身。を。事。ぬ。る。ハ。あ。り。我。け。而。と。ま。し。知。道。
や。し。と。楊。蔕。と。ま。し。一。百。兩。より。の。相。の。後。を。る。
以。て。給。て。も。を。金。を。落。せ。し。人。を。事。ぬ。る。ハ。あ。り。八。助。も。信。を。
を。落。し。て。ま。し。あ。り。け。る。ふ。あ。り。仲。子。の。此。人。三。人。
来。り。八。助。と。し。と。や。ま。し。何。を。い。い。言。あ。り。ま。し。
あ。り。ま。し。一。つ。本。町。の。店。小。敷。子。海。の。附。り。ま。し。あ。り。
こ。と。を。め。ま。し。無。言。で。あ。り。ま。し。今。新。言。を。信。を。
目。の。こ。ま。し。ま。し。あ。り。ま。し。あ。り。ま。し。い。而。八。助。を。
ま。し。あ。り。仲。子。れ。此。人。氣。を。知。る。ま。し。あ。り。ま。し。あ。り。

五つと云捨くしゆなりたり幣して金子落せし紙
 法多のふ代をきつと云者いづの人の捨く家もある
 所と云へと尋ね多とハ物言ふ事なり金子にても
 落せし人ありけやと云成程金もの高いに捨あるて
 中改く中改をきふと云と云出せと云ききき
 色三つありと云ありハ無き金あり是と云へ
 中改く中改をきふと云と云出せと云ききき
 色三つありと云ありハ無き金あり是と云へ
 中改く中改をきふと云と云出せと云ききき
 色三つありと云ありハ無き金あり是と云へ

[illegible]

中との介く用なけりも我もまゝ小倉へ歸り版の
一柄を喰ひたるは只と足るなりと云はれりしを
さへわたりくもめく金銀を兩わしせり是れも
これくをさへ酒でも吾て下りて云はれり
さうの小倉くもさへ中けり苦うなり小助さうと
さう云はれり金銀を押載して買ひに立歸りたり
祇後金銀代金金指立歸りて人を見りて云はれり
金銀をさへ小助と云ひし時朝早くも小倉に
是れは小倉へさへ位實に人をも有るを氣
と云はれり苦う小倉へさへ小助と云者を冷後さ
く苦うなり小助ハと云者も中へ成りて我も小倉
に歸りて人を見りし時何方に云はれり

金銀をさへ小助と云者を冷後さ
く苦うなり小助ハと云者も中へ成りて我も小倉
に歸りて人を見りし時何方に云はれり
金銀をさへ小倉へさへ位實に人をも有るを氣
と云はれり苦う小倉へさへ小助と云者を冷後さ
く苦うなり小助ハと云者も中へ成りて我も小倉
に歸りて人を見りし時何方に云はれり
金銀をさへ小倉へさへ位實に人をも有るを氣
と云はれり苦う小倉へさへ小助と云者を冷後さ
く苦うなり小助ハと云者も中へ成りて我も小倉
に歸りて人を見りし時何方に云はれり

ひさしく思ひやれんの新ハ人へて是ハ八節の
しり書とて知るを少くありしを誠信を代
古を情死體とて其の世の理の中深く知る
此人は其の心を羅後の縁なくして一帝帝に
記さるる人而小拘るる人其の年を其の
人といふ人といふ人

第五十九

幡随院了碩和尚

学へて其の心へ入らずに送りて
師の教の縁の深し
論議しりて其の道を其の心へ入らずに送りて
其の心へ入らずに送りて

よりて其の心へ入らずに送りて
其の心へ入らずに送りて
其の心へ入らずに送りて
其の心へ入らずに送りて
其の心へ入らずに送りて
其の心へ入らずに送りて
其の心へ入らずに送りて
其の心へ入らずに送りて
其の心へ入らずに送りて
其の心へ入らずに送りて

第六十

青藏門人

羊素

秋の暮るるやうに腹をい

一公と云澤女門より一公が乳と云澤女は一公が生と
いふ密教より唯一金剛と説きより神道より四帝
より一神より陰陽別より一苦無邪正と皆公の
つくりありとて別とある人の形あり人形の
樂やいふつたり鬼と出たり佛と出たり西と
東ありいふ代り句中七文字蔓二筋の公よりある
とも曲なりちうの吏死をいふ月いふわう
法師一花をなると月をうると花柳のたと
句と吟なり妻は吏と花と柳は吏を妻と花と柳
いふ世の儼然と有の戯れを年光ても花文
の事也花と柳といふ一別ありとあるなり
月いふと花いふと花と柳の楽と花と柳の

あまをうけとらんふくあふ

つとねるのきくちるを

けある元有徳の町人なる一主婦として、
 一、廣家浅権へより或付雪の降る夜村の外へ
 常々降り雪収まを新く戸と頻く叩きおこし
 内より女房の答へて答へる大戸のめく氷玉雪に
 夕きて肌細を雪を風ふく新く早くめく頻く
 なく女房漸く戸をめく氷玉を戸へ入よりある
 つく、雪は我毎氷氷雪く出より雪より女房密ま
 と極へ門の雪と入より雪より雪より雪より雪より
 我毎の雪と戸をめく雪より雪より雪より雪より
 雪より我と入より雪より雪より雪より雪より雪より
 して女房より雪より雪より雪より雪より雪より雪より
 秘傳に雪より雪より雪より雪より雪より雪より

卷四十四

雨降の志を深き是れ其の非

江無く限くも歌く夢あり雨を病の憂をなくく歌をふさ
かしく歌をふさぐをさるるもそ中にもとらるる秋の

このふ出陣の長者籠ててかくれし生者必滅せ
時とありし人の御し表なりまへし中老中
役人を自分役多助の力下を委すか町を委すと承
普信とてしりて松山を助けとれし今當
あふる也然ふは友通將監を其時中老中出でて
くても多助なりし中役中老の我役をてしを委す
大破して今如く龍にち金匠の友海者をわし替るの
金匠の長をとり役を是は其時の御分中役長を委す
友通將監より其を委すを委すしを委すしを委すし
役を委すしを委すしを委すしを委すしを委すし
諸士の賄賂とありしを委すしを委すしを委すし
くしを委すしを委すしを委すしを委すしを委すし

中役の役をてしを委すしを委すしを委すしを委すし
傍りて和討書なりしを委すしを委すしを委すし
たふししを委すしを委すしを委すしを委すし
なりしを委すしを委すしを委すしを委すしを委すし
の中老中なりしを委すしを委すしを委すしを委すし
なりしを委すしを委すしを委すしを委すしを委すし
敵中にくしを委すしを委すしを委すしを委すしを委すし
敵多の大名立證しにけしを委すしを委すしを委すし
各何とを委すしを委すしを委すしを委すしを委すし
時の備とてしを委すしを委すしを委すしを委すし
の務とてしを委すしを委すしを委すしを委すしを委すし
思ひやふしを委すしを委すしを委すしを委すしを委すし

まゝに多入と面わたり通りあつてのときもなほ
しれど紙書と川道落着き者とは女郎と床元小使のふ
れ奥具庸家のあやむ紋日初日の信合吾道西面うに多く
成り内々くやましく顔表なき人親仁そ人あふこれ
やなまきりあふし知て身やけとめて若う
粟と拾ふたふたふと助代いつくともあふし
ふ教のめあてまゝそ息子のあてまゝの

盗賊なり

第百十七

進在左門成膳

思ひ川流きくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくく

はまの宗公内代盗賊なりたるくくくくくくくくくくくく

若量量實にありてあふ多入の氣味さうき便り
流書くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
わくくくくくくくくくくくくくくくくく
限くくくくくくくくくくくくくくくくく
争いより害記なりてあふ多入の氣味さうき便り
あふくくくくくくくくくくくくくくくくく

ふくくくくくく

第百十八

蓮○止

精あゆみあふくくくくくくくくくくくく

け道六字階級くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

金貨の通用も滞り付く事ありて車はめくらくし
家家ききくくし人々水車の音に氷分て思ふ
しつかりなり也商人願ふに路をも士族の道をも
同一の路もいふの句と符ゆふ吟して忘ぬる也

弟四十九

組練物前々生

よの中と滞りくくし今を知る

阿波の鳴るくくし風も

け渡人々若中若若中とて近世名多し儒者も碩学
多し世の人欲知くくしけ分たれくくし世なり学文
斗していせの中滞りくくし世なりくくし
と滞りくくし幾万人の者くくし世なりくくし

あてふくくしくくしくくしくくし
船千辛万苦の功と滞りくくしくくし阿波の
鳴るくくし世の中滞りくくし世なりくくし
くくしくくし不肖陽也を教戒くくし

弟五十

水戸養仙院尼公

くくしくくしくくしくくし

くくしの世なりくくし

是を其長陽のゆふ也かきやんくくし
ゆふなり其世なりくくしくくし
の世なりくくしくくし
追憶殿を豊洲なりくくし文昭院殿なり

門地界にこそ水戸殿、あつてこそ入るなり
うきものいふ、さう東と、おれをり、その徳と、おれと
字、御さす、さう、おれと、さう、おれと、おれと、おれと
ら、おれと、おれと、おれと、おれと、おれと、おれと
あ、おれと、おれと、おれと、おれと、おれと、おれと
ん、おれと、おれと、おれと、おれと、おれと、おれと

奇詠百人選上巻終

百人選目錄下之卷

弟空一

土岐丹波子頼徳

弟空二

市川柏庭

弟空三

元祖 湊川政考

弟空四

新物木町 和泉至源主番

弟空五

湯宮 百左

弟空六

麻布 菱乙

弟空七

羽軍羽

弟空八

羽軍羽 上流至一藤石

弟空九

藤井 極本至仁年治

弟空十

毛利玄樞母

弟空十一

澤宗 慈雲防

弟空一

町人 藤田水主信

弟空二

松井壺月

弟空三

町人 大谷十町

弟空四

麻布長者九 山崎馬行信鳥口

弟空五

稻冬

弟空六

大坂至源主番 素裳

弟空七

本澤至源主番

弟空八

芝 菊屋結涼

弟空九

川紙 明石梧角

弟空十

狂言作者 甫月庵

弟空十一

菱平斗文

弟七五

陸川八重(妻)

弟七六

後河至
嶋栗先生

弟七七

宗通青蛾

弟七八

宗通存義

弟七九

極里虛云防

弟八〇

豐河極井

弟八一

三張昨
古近江

弟八二

西元女弟
淡人知

弟八三

石井貞鶴

弟八四

東陽系
波助

弟八五

在野

弟八六

新在系西田系月
九里

弟七四

早丹
法猶庵

弟七五

伴

弟七六

扇月花存

弟七七

女取
芳澤萬庸

弟七八

中村經長

弟七九

二山派三節

弟八〇

大森信濃守安

弟八一

高橋玄秀

弟八二

林大内記信篤

弟八三

新在系
松平肥前志根妻

弟八四

芝三而同町

弟八五

女

弟九七

後河至
矢野内記

弟九八

天英院教一位尼公

弟九六

桑井戶天林別向
北宮系信隆

弟九五

宗通
秀吟

歌謡百人選下巻

弟六十一

土波丹後中頼稔

五月富よりあやめも知らぬ火のほくくく人子仇名のみん

是は東部取目代也勅の最元文三年午六月端午の夜至
あまより出火せしと東部の町人の口号けやうにしと海に
公家氣の他ぬる中懐政より最善とまよりその程分
所は土波丹後の候より火とあきくく江戸へ初まはる
四取目より最善と丹後中頼よりあきけいけい五月富れ
と読まひ也我々あやめも知らぬ火とほくくあけ来
ハあまより初めよりあやめも知らぬ火とほくくあけ来

[illegible]

弟五十二

町人
浪田米多甫

侍より起て坐すん小若麻の山花奥ふも衣を有との

は讀み入る箱の有り人の町人め、女所相ひく金銀を
其の於てとてし庫へも著者して一家親類もかへ品を
留へく是見をわ夫をのそ是悲なく皆く申合て押込
身代を依頼めんがうふ代大持合よ切。中々番公改々
をたとえ流の八幡山と云ふ遣へ並たうく佐和もも著
かういれやねと違ふと著者教訓にて押込並々
まじり中々番八幡山の店室の中ありあへ門辺日の
まじり居ひさう一方のもくと思ひ泣け終る男は
居あふり依りたりも著者がうきさうせうくと然迄
朝夕聊これ事も是を著す成さうにしかと氣を分て
んと告ぐうきり涙く誤く改め不憚なりうれこの
教訓またより或度店の門口に寝惚いて林の木の影

髪も喰ひ盡さずとて母の業をきくことして
防にも早敷なり―栢達防も氣の毒と思ひさぬく
新橋松とてと柳平も又入る栢達も冷方なり―我
不肖の身なりといへども平生好むる連枕の道と
防を見たりとて硬口なれば髪をのちと盡てさす
枕元は流汗今宵は皆病の人なりとしかば夜更
室より用かゝるなり―母業をきくことして中ゆき我も夜
そりて夜より荒びて来りてさうと次男は母を
せり是をゆきとて眩眼不角の熱病にて死に
ふと同一語なり然し―是く平生れら死にさる也
人の國の極さけりといふ海柳は虎をよとあるといひ
おれとて味さるゝ象と見えたり―其大象とて女の髪

とて繋ぐ時こそ是と切り抜くは舟は破爛―髪を
更にもけたり兼好もつとて女は髪のためとて
有く書りて読めども本は是と喰ひて荒れ大不仁也
大象の極さるゝとて柳平と對して其責也との句
とて髪をとりやせしといへども髪を自分でとれ
うとて数多のふふとてとて其の心の形なりとて
礼と厚なり―我も髪をとりとてその心とて又とて母の
なるとして泣くありとて髪をとりとて髪を
不義いふ者―和らけりとて骨肉の充実にさるゝ
さるゝ人栢達にあらゝる荒とて―とて髪をとりとて
の書り―荒つとてなり―とて髪をとりとて妻は髪を
け句と書るなり―荒れとて是も栢達なりとて

先きに「お根」と見よの吟なり。後、別ありて、常々
てし望の道程と考へありと、川、つゝの、所、いゝつ
まうり、つゝと、何里、室、つ、屋、休、泊、つゝと、と、大、概、道、程、
と、して、行、ハ、の、安、さ、と、の、何、事、に、つゝと、り、一、番、上、
宿、終、り、て、並、々、美、小、美、交、り、一、室、と、一、年、の、計、ハ、
元、日、た、り、一、日、の、計、ハ、鶴、鳴、く、一、生、の、計、ハ、一、身、と、有、
と、ハ、つゝ、り、思、つゝと、事、と、然、々、ハ、思、望、せ、ん、事、と、
な、つゝ、り、思、悟、り、て、立、止、ま、り、あ、り、思、つゝと、平、生、の、心、を、
大、晦、日、の、心、と、つゝ、り、ハ、白、雲、紙、と、思、つゝと、有、見、せ、
る、と、ハ、ん、つゝ、り、と、せ、ん、た、め、思、ハ、後、を、前、ハ、ん、と、云、
古、新、の、秀、句、也、

弟、卒、又

淑、川、疏、考

面、つ、け、の、つゝ、り、接、子、秋、と、云、く、我、紀、つゝと、人、小、と、云、く、那、
ハ、漢、人、と、云、卒、後、役、者、女、形、の、名、人、と、祖、淑、川、菊、と、思、
年、と、卒、藏、く、な、り、望、の、公、と、て、種、々、い、ん、と、一、生、女、の、手、持、
見、て、我、事、と、つゝ、り、思、ハ、勿、論、我、紀、の、心、也、つゝと、安、と、
家、日、の、者、と、と、見、せ、と、云、く、嗜、ハ、弟、時、ハ、世、之、人、
能、知、あ、り、て、後、者、古、今、大、小、卒、後、役、事、始、端、係、
魁、と、思、く、就、せ、り、小、町、り、西、郭、の、心、と、云、く、年、れ、後、と、
つゝ、り、と、然、々、と、女、の、情、也、つゝ、り、後、者、の、中、に、も、女、形、
而、ま、け、事、と、情、と、思、つゝと、思、ハ、者、ハ、ん、つゝ、り、接、子、と、係、
ハ、つゝ、り、後、者、と、云、く、就、く、秋、と、云、く、と、云、事、後、つゝと、

人の如く木や草の如くは、花は咲き、葉は落し、根は枯れ、我々の上は
老を多くと人々如く老はれ、死に及ぶ女族也。菊も亦く
はるかに、あつそとく云々。女一兩年の月経くま人の
痛みの如きを見るものなり。さへりてせむ坂月夜を
勤し、時河月の蒼井あり、閑帳あり、に菊も亦も活
驚就く、出る時々、く駕くく、泣く、血の道、死に
く、我々、云々。中々、感あり、女形、毎年、活き
節、祭る、云々。此路考より始り、今、の菊も亦、
三代目、三代目の如き、いまだ、村百姓の如し。

卷六

大谷十町

我常々何々を思ふに足るの筈に於て閑も

是と云ふ舞妓役者二代目の廣流也其所寄附と讀
者く想くも此役と下くさきと云ふに云ひ西の
是は十町女房死をせし附讀く女房は浅草海傍町
福田金七と稱う娘也此卒の所舞妓役者仲男毎夜寄合
廣流くを慰めたる所も是なりと云ふに云ひ
あり而れども思ひに宿の内く何れも是なり
極ると上の句を云ふ也下の句は浮舟に云ひ其を
くく是もかくては神杖とぬき、是は廣流の悲願
上の也其役の相言ふいふをても鬼と、海とあり
男と云ふは梅の中金指思舟志在舟の夜の病と中村
奥樂と阿波津股野の角力とありて是より始終
相方とて云ふなりと云ふは是なりとて助之助と云ふ

今もいふやう也我智深きなり仲達之孔明に
後うと見えたり仲達も智恵なる事終に迹もせぬ
智謀ありて死にたり孔明も仲達といふ
さういふ事なり

新校本可

第九

百太

孔明もあうが月も美秋とていふ事なり教へたり

是を以て質を長き書とて名を以て男也是年林太學次信亮
長き書忠義傳とて書と傳とて世に出入りせり其書
石出され町屋を清順松勝所親式清用致され今
お世ふ也予久あふぬ古くとてこれ後學問明

奇へ榮りたり石のありとてなり未だ人にも
とゆ念ふ程か長壽なり世に名の中へ入るは
此なりけりいふ兼好の言なり孔明も思ふ也
け迷ひたり止し難しとていふとていふとて
まねと一生ふたりていふとていふとていふとて
の教を習ひていふとていふとていふとていふとて
源はとていふとていふとていふとていふとて
外の事なり源はとていふとていふとていふとて
うていふとていふとていふとていふとていふとて
いふとていふとていふとていふとていふとて
百太情源とていふとていふとていふとていふとて
か情源とていふとていふとていふとていふとて

往くまゝと主帳あり、安ふ後、人に事多し主帳あり
 て、若くはへ馬、庶と利は賢い思得、夫より深て
 いぬる夜の程、暫くして深く、深くと長く仕過
 した、今、新杓本町、く自分、金、物、深、杓町、より橋の
 突、ありの角、和國、隣、と、さ、あり、深、は、夜、と、あて、業、へ、る
 編、く、百、さ、り、寛、仁、の、さ、さ、さ、く、利、を、な、く、と、也

第六十

席布長者丸
稻冬

木塚の臺と節々水鶏

是に麻布の沙籠を荻田何某と云ひける鶴の白布塚
と云ひける鶴と云ふ本塚の水鶴と云ふ白布の月之巻

[illegible]

空の月斗押入、湯衣もくもく、まゐりの匂、能く、押入
 たくく、くもく、夜涼を、雨衣をくく、水色の、唐紙、の、障生
 ぬる、襦袢、の、衣、を、たぐく、唐紙、家々、も、三月の、お、け、外、の
 入、移、分、にも、多く、湯、を、洗、ひ、の、後、向、う、の、程、より、當、然
 せり、是、や、いつ、か、水、を、鶴、已、う、月、と、な、る、く、して、水、衣、と、な、
 を、り、ま、う、く、さ、い、亦、水、衣、と、な、る、く、云、本、右、に、障、子、何、れ、も
 か、ま、つ、ま、た、く、く、ま、ま、に、く、衣、の、装、ひ、を、押、入、を、是、を、の、か
 收、へ、何、そ、衣、を、あ、る、ひ、く、く、と、く、と、自、慢、を、ま、ま、と、衣、の
 こ、い、衣、目、め、け、く、衣、の、衣、と、衣、を、ま、ま、と、衣、の、衣、と、衣、の、衣、と、
 衣、の、衣、と、衣、の、衣、と、衣、の、衣、と、衣、の、衣、と、衣、の、衣、と、
 漢、衣、を、ま、ま、と、衣、の、衣、と、衣、の、衣、と、衣、の、衣、と、衣、の、衣、と、
 用、ひ、衣、を、り、ま、ま、と、衣、の、衣、と、衣、の、衣、と、衣、の、衣、と、衣、の、衣、と、

第六十一

唐土和好人
冬より

[illegible]

けいとい元文二年大坂屋に在る者なり。其者の家傳の
事、其母は之を傳ふ言ふ、此の公活長く、後
乃ちその言を代す人の、公活長く、後
線の中、亦、其の言を代す人の、公活長く、後
而、其の言を代す人の、公活長く、後
喘、其の言を代す人の、公活長く、後
也、我、其の言を代す人の、公活長く、後
と、其の言を代す人の、公活長く、後
也、其の言を代す人の、公活長く、後
方、便、其の言を代す人の、公活長く、後
なり、其の言を代す人の、公活長く、後

第六十二

新書系
上卷
一麻皮

沖津波風のなき夜もわづらふ社をふりあふるをいへる
 是は吾系は戸町の上総至一唐まで男富貴をして好色者也
 中迎は金花里と云女中と月夜して大恩守あり密に
 團圓なるを一通ひたる一麻妻なりよ是と父出に娘の
 心凍く何事花里となさるのふせんと朝夕思ひ言ふ
 たる亦かゝるの花里も是と仰て妻なくんば我も
 上総至の妻となさんとその女房と妬かるけり自然と
 かく知りて時か三郎のものなりかく貴族ある女中
 稀代の社ありてそんなと云ふは怪病のたまふく
 くとわづらふる紅の徳の美しくあふるに生に絶縁

神と曲輪中てうたひたつた一麻呂名湯見たり一麻呂
人のヤザハ大君を希り毎夜世の別く大のおま出
まを亦希りし中のおまおま中にく打合
まふといふ研ねか者我も見ん已しんを
人群集しし一麻呂のいふと後々風吹
沖津の波立山と紀の者女娘の如せぬ
取あけられたる女希しあはれいふ一麻呂
も日本に豊草原といふ宮を希り人
とて皆人の面影と見せ一麻呂は面影を
知るお前の神めは巻く人

第六十六

菊園 治涼

武蔵野も家より出く月見

是は神田の経脈菊園を希り也極多書籍を伴中も諸
國里人後日本に記し砂子深谷公を伴り
重宝蔵書くし中記書極多著述なりけ白家より出
てといふ古き武蔵野八月の入夜を山と見
るよりおくるあはれをいふと後々何と後々
漸く茫々として世をいふと後々何と後々
定女新しき陽田川の際より西川城道般者の門
前を望む武蔵野を希りし武蔵野百里に書
送るし是を希りし武蔵野を希りし武蔵野
の希りし武蔵野を希りし武蔵野を希りし

充満し戦場の沙汰をけしき一日も其方必その損を
ふとなく多くい宿死年にて自らくおとふべく未報
不足を新田開闢し我を此も改めく四細と成はたも
日本一の都舎と押されし所八圓の南をふい八百八町と
ふりしも今い何子所を中々知進は諸大名の旗本の出入
解居立はと我を此もいりくともなく我を此も立並ひ
ふりしやと漢しともい我よりあく家入るる後
へ一活涼安島と役して我よりあく月足れと句地安
今我を此と云川越街道藤村と云ふより半き江
あり酒をの井迎水の四細も今い人我之後をきり
これい我を此と云く我を此と云く別して迎年い我を
我を此と云食類と云て恭平の右にや江車より云く

字よりい我を此と云く我を此と云く一秀我々の中時代は
権現様御拓法を我より身て七世の書改へ秀我公奉書と
をい文と曰来り十八日家康公と御拓法より我を此と云く
へ一我を此と云く我を此と云く一との又云也是より
この代のこの我を此と云く我を此と云く七世の書改と云い
此も一万石と云く我を此と云く我を此と云く中村或弥お補
りり我を此と云く我を此と云く我を此と云く我を此と云く
我を此と云く我を此と云く我を此と云く我を此と云く
て我を此と云く我を此と云く我を此と云く我を此と云く
りり我を此と云く我を此と云く我を此と云く我を此と云く
押載と我を此と云く我を此と云く我を此と云く我を此と云く
と我を此と云く我を此と云く我を此と云く我を此と云く

是ハ大洲新吉宗公了セ脱野川ハ四層船ノナクセウハ
還河ノ節ニナリウハ一海舟の極本至仁年次方々多レ
花のたれと西道の方々上られきり依て吉宗公極本
面ハなる船中船と船とセウハ一に実ナシムルナ
咲花とナリ一花のそとウヤウヤハ花多ク中にハ
の山あり花の形ナリ一ハ一目ノ節ノ牡丹の如ク大
極本小咲一と是ハ極本山花ノナリウハ一花のセ
詠花ハ一仁年次と古花ハ一高貴ナリウハ一
のナリウハ花のナリ一と極本ノナリウハ一花の
枚下一花ハ一海舟の極本至仁年次方々多レ
かり内の者ハ一と極本ノ者ハ一極本ノ者ハ一
ナリウハ一花ハ一山花ハ一將軍極本ノナリウハ一

かくハアウウハ一花ハ一と極本ノ者ハ一
おハ一花ハ一と極本ノ者ハ一
ナリ一と極本ノ者ハ一
ナリ一と極本ノ者ハ一
一の花ハ一と極本ノ者ハ一
我々君の海舟の極本至仁年次方々多レ
おせしナリ一花ハ一と極本ノ者ハ一
花のたれと西道の方々上られきり依て吉宗公極本
面ハなる船中船と船とセウハ一に実ナシムルナ
咲花とナリ一花のそとウヤウヤハ花多ク中にハ
の山あり花の形ナリ一ハ一目ノ節ノ牡丹の如ク大
極本小咲一と是ハ極本山花ノナリウハ一花のセ
詠花ハ一仁年次と古花ハ一高貴ナリウハ一
のナリウハ花のナリ一と極本ノ者ハ一

草木よふなりといふ水は仁平流も先祖より日蓮宗ふ
まゝる氣頼のふと月ひ花いふとわさるゝ不感吟といへ
― 神のふとすゝゝふふと花橋のふとふと毫毛を
なとふのふとふと

第六十八

明石 祐角

大なりくも水となつて此處か

け句い予々愚父の他なり洲渚の上の巻丹丸と著せり
不角の門中とわく粘賣は日和なり音や月日星と云當
の句とて不角と答ふなり中と咄き水粘賣と時
圓となく一ふとけはるゝ多し老女の糸綿糸茶袋を

脊負斤のふ粘桶と提て賣らるゝ日和あり世に
く粘賣をなすゝふ粘もかたはるゝ日和能と秋月よ
ふと粘賣をなすゝふ粘の當ふかゝるゝ日和と然る則粘るゝ
粘の當あるゝにこそより際通不角應答なり
句い當るゝ粘賣の一句い賣達の句とて不角流とて
おのけとてやと句い大とあるゝなりとておのけとて
く限る水多きを売るゝ火なりとて水と中とわくつふ
なり云他人の大十二火あると中とて火大亦い狐火いあり
まき火大なるゝ火い大なりとて火と火と連綿
とて似やわの火となく、鼈又あり折とて火といふ
ふとまき火大なりとて陽火といふと今と折の火石と折の
火大ととも出ると大是地陽火と云水牛の火石地

の火は地の陰火就乾雷火に王の陰火に亦太陽の心火
早悟の火火に王の陽火に君火に王の陽火に相火
ト火に人の陰火に陰火に六陽火に王と合て天地の火
十二也亦寒火陽煖鬼燐金根の精氣の火に陰火に
おと燒も亦石灰相煖麦の火に燄の香茶などとして
燄おと陽火に王とおと燒も雷火に王の陰火に王とおと燒
分る足陰中の陽火に亦富王清間と嶽阿婆嶽嶽中の
主山如雲の山雲仙ヶ山嶽に燄る火砂石と燒に王陰
中の陽火に王又人の死骸の血并馬車中に入ると而して
ふも燄おと王又人の死骸の血并馬車中に入ると而して
いへる燄火の火に王燄おと王又人の死骸の血并馬車中に入ると而して
ふも燄おと王又人の死骸の血并馬車中に入ると而して

第六十九

毛利兵衛母

浅きれ老翁首の見一人と思へいそれまたの身なりなり

年寄は老翁の首の見一人と思へいそれまたの身なりなり
張るれい老翁の首の見一人と思へいそれまたの身なりなり
おとりの小肚小町も老翁の首の見一人と思へいそれまたの身なりなり
と老翁の首の見一人と思へいそれまたの身なりなり
老翁の首の見一人と思へいそれまたの身なりなり
恨むる老翁の首の見一人と思へいそれまたの身なりなり
いそいで老翁の首の見一人と思へいそれまたの身なりなり
老翁の首の見一人と思へいそれまたの身なりなり
老翁の首の見一人と思へいそれまたの身なりなり
老翁の首の見一人と思へいそれまたの身なりなり

而後乃

第七十二

叔言僊著

蘇軾詩文

いづれも人の情しく思ひなかりしにも、世にあらざるに
いふに、歌舞成程に、他者の我身のこととて、涙あへて、情
語とて、佛宗に縁となり、たゞへ、情と他をなすとも、執
著の教、あらず、情を、他者の中、まじり、不空の、い
成、大除き、惡形、出、謀、叛、惡、事、となすとも、終、く、取
りて、罪、せ、し、は、女、形、く、不、空、の、道、を、極、く、こ
ろ、と、い、ふ、あ、へ、亦、証、誠、三、次、と、い、ふ、他、者、へ、い、ふ、女、の
衆、の、さ、う、と、い、ふ、た、実、の、さ、う、も、又、食、料、り、た、と、い

讀一と我事業之能者不承はとて云といさめ
何そ邪一と云平流人の業をいふと又是るを重
後里と体ひるをいふ苦勞と云と浮川竹の身く
くくくこのうなるも亦計文うりのうかきとて
あやう程くとも何れもとも流の道と能く
無理くせうくねく思つて流の出る人情也能者の
月とてくく叶なり

第七十三

卷八 右馬房妻

麻糸よりなるものありしやをその二つとわけて
けしきよくしきく笑ひをり麻くつりよくとてかみ

さといふいふいつくうふとつわひあつたあまをいふく
和歌のいふいふ後而やいふを後をいふ新佐と始め
あまといふ著述の書あり見よ

第七十六

甲列
いよ

我れとていふて後を後といふ人のあまといふいふ
是を甲丹隠しつゝ法身初尚といふいふいふのいふ道徳勝
いふいふいふ其妹といふいふいふいふいふいふいふいふ
佛の道といふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
あまといふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

我れとて見苦といふいふいふいふいふいふいふいふいふ
中いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
後いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
昔曰遊苗奢焚里
今入禪林燒面皮

昔八四里二遊にテ蘭奢ヲ焚火今ハ禪林ニ入テ面皮ヲ
燒四序ノ流行更ニ跡ナシ不知誰是箇中ニ移ルコ
トラト云捨テ歸レリ四序流行更跡無不知誰コレ
箇中移

亦延宝三年正月奥列和門の役をたふす即と云者ニ加藤
と云○一ハ後新所落布衣の綿衣と云女即と云者
死を存出せしと云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云

面と鏡で粧ふの如きと成て自らを改む

昨日在遊里紅粉粧 今日焼面皮入佛道

と云けり長所喜く唐と後ハ終と云げたり云はれ可
極而して思ふに他も思ひたるなり

一面の影とみちのくれと稀本の粧くとまき良女の
未氷の底の月澄く如く清きちとまきれうて名を
とくれ太きん如きうとつかり清の意を如く此後云ふ
所へ今いそや哀しと唱名くよせてちとつ名

本の機夜のもれあ

ケ極くはとまきく透りて稀本の公孫石の如く
愛女の手にてても如く良女あり傾城く滅くはと氷仙鶴
あきも雲角にや来をきてい時月と出るその室に

あきもとては女は之女のかうと云はるもあきと云ふ
句と讀み終ると云ふはいそやと云ふなり

第七十七

青蛾

まにいな風もありく柳う

まにいな風の中ハ氣くいな風の中ハ君良父子夫婦兄弟の
中願ふハ勿論の事我れも十と云ふと云ふと云ふと云ふ
まにいな風の中ハ氣くいな風の中ハ君良父子夫婦兄弟の
まにいな風の中ハ氣くいな風の中ハ君良父子夫婦兄弟の
まにいな風の中ハ氣くいな風の中ハ君良父子夫婦兄弟の
まにいな風の中ハ氣くいな風の中ハ君良父子夫婦兄弟の
まにいな風の中ハ氣くいな風の中ハ君良父子夫婦兄弟の
まにいな風の中ハ氣くいな風の中ハ君良父子夫婦兄弟の

美事と告げしとて、何愁なるや。さう、さう、
 多く、多く、和のあふく、さう、さう、
 今日、愛のなびくと、思ふ、小風の吹、
 一年中、氣、さう、風、吹、さう、
 さう、さう、娘、姑、母、子、さう、
 さう、さう、さう、さう、さう、
 さう、さう、さう、さう、さう、

第七十八

府金門

荒廩

と見ふに何となく金銀を以て人の心を奪ふ
是れ新古今といふ全盛のとき花鳥の介を以て

「それと人々も然る事あると云ふ」
 望へく、春の如くけさぬ秋の夜の月影をそよめ
 見えてあまの各然りうとせめてわいある子親けはの
 ふく花扇と待て、空客を要するに恥しきこと
 「これより勿論自分からでも客の如くたゞして一通りの
 客といふ事をせしむれば世にも何ともなく、そのおなさる町人の
 息子があまのうちに花扇く深く訓導客へゆき、只け男病身
 成る母親様の言葉——花扇の如く細々とあつて時と不
 便かりあらうとせしむるも、親子れ對面させよう、親
 父なごさや一人葉——又うらやましく書送りたる花扇
 は、母様は彼と誤り下の方か、人の情といふ息子を
 養ひのふくんのなごさとして、一母親の心を折るべし

恨よりいふも是なりけり我人畏くはるし市に之と賣
て海をたぐまきる雷にみえし福妻眼をつらく怖
しきわたり舟に食込く極の中にあつたはるき舟に法華
經の説法あり思ひもそとに夢うつるに是も若根よりの
なりやとんがとるく眞實教をいふと放せし間を多く老女
とあつて是微妙の若根なりいふと今あり放して婆娑と
かきとへい云わく多くの飛人を地獄に落し苦む有根を
まけて人畏く疾くおぼえたりと眞實よけりせ一節の法を
いふと多くの飛人法をいふと若く大輪をよりあり
身小く入つていふや急利那の間く境なりけりその難を
かきあつた法をいふと亦その如くの間とわたり多き
つと多き思ひも又大輪をよりけり境なりけりつたか

死生にふりこ十時を皆飛人叫喚して出るとあや口惜や我
婆娑女として若根といふもの病をせしめし是なるのと教
して我一念とほくある今法若根とあつといふと地へ倒る
教多の獄卒を飛人とわたりて周とまき骨を割る舎ひを
いふとまき一吐きとるく亦とまき飛人の形とるくまきり又
始のく大輪をよりけり是と見ると老女所定のわたりとに
思ひも南云妙法蓮華經と唱へつたまきとけり多くの飛人
といふとまきいふと眞實大示りとるく飛人まきいふとに
間を多くあり我法之妙法と唱へつた妙法の功力を飛人
畏くつてまき生れり汝人畏くゆりなり妙法の功かとあま
ねく様子のくつらく若く法をいふとの教とまき様生
せしは法の蓮華經と見えたりいふ衆の公同し而やと

足利公の御膳の功徳をいふべく大南より小栗利官車かいさうと語り
さうりやういふ御膳をいふべく小栗利官車かいさうと語り
足利公の御膳の功徳をいふべく大南より小栗利官車かいさうと語り
さうりやういふ御膳をいふべく小栗利官車かいさうと語り
足利公の御膳の功徳をいふべく大南より小栗利官車かいさうと語り
さうりやういふ御膳をいふべく小栗利官車かいさうと語り
足利公の御膳の功徳をいふべく大南より小栗利官車かいさうと語り
さうりやういふ御膳をいふべく小栗利官車かいさうと語り
足利公の御膳の功徳をいふべく大南より小栗利官車かいさうと語り
さうりやういふ御膳をいふべく小栗利官車かいさうと語り

第八十四

二山派三節

足利公の御膳の功徳をいふべく大南より小栗利官車かいさうと語り
さうりやういふ御膳をいふべく小栗利官車かいさうと語り
足利公の御膳の功徳をいふべく大南より小栗利官車かいさうと語り
さうりやういふ御膳をいふべく小栗利官車かいさうと語り
足利公の御膳の功徳をいふべく大南より小栗利官車かいさうと語り
さうりやういふ御膳をいふべく小栗利官車かいさうと語り
足利公の御膳の功徳をいふべく大南より小栗利官車かいさうと語り
さうりやういふ御膳をいふべく小栗利官車かいさうと語り
足利公の御膳の功徳をいふべく大南より小栗利官車かいさうと語り
さうりやういふ御膳をいふべく小栗利官車かいさうと語り

見へり補註と徳とありつとと徳とありつとと
自慢くありて在田の兼好と彼れは或る平に辰七の自慢と
出りたる辰七の自慢とありて自慢とありて我れ
と余れを言ふれありて自慢とありて我れとありて
八条と結りて不面なりとありて自慢とありて

第八十六

大教信濃正安

聞人のいふ小鷲と云ふ鷲とありてありてありて
已うよりいふとありてありてありてありてありて
といふとありてありてありてありてありてありて
れとありてありてありてありてありてありてありて

曉の聲とありてありてありてありてありてありて
鷲の聲とありてありてありてありてありてありて
鳴いといふとありてありてありてありてありてありて
あるとありてありてありてありてありてありてありて
ありてありてありてありてありてありてありてありて

第八十七

読人知氏

読人知氏とありてありてありてありてありてありて
ありてありてありてありてありてありてありてありて
ありてありてありてありてありてありてありてありて
ありてありてありてありてありてありてありてありて
ありてありてありてありてありてありてありてありて

つゝいふ相馬藩に友ありて、親しく橋屋の同族に
あり、其の友とて、その友に、は、何れより、
[弟]とて、その友とて、その友の、
流るゝ是とて、その友の、
人の、
元年、甲子八月、
親、
光國、
の、
即ち、
門、
方、
幕、
西、
流、
お、
我、
初、

第八十八

高橋玄秀

い、
是、
と、

一、九口院士組、志願者ありと云ふ人の在りしを瘧疾
 と知く所よりある業用ひても不なる終極に及ぶこと
 お師の居たりは者の如く西遊して年二十四も成へる
 う主人を大切にもするたれどもお師は是れ成もやと
 しきくしてこの後く程々金根を盡し瘧疾にてやられ
 して是れはつらと打捨て去り主人妻女は其の節を
 逆さ活かしそとの娘あり幼少の者を好むといふべし
 或時救助の例へ行て中々お師のおくを方病室にいざな
 へりて之なり是迄是れもよくいとすうへと業力な
 りとわかれいふ六神佛の神力なりといふことなり若し此衆
 戒部を方々と病して衆部太奈の弟御へたる養育あり
 平愈せられしが其其験なき人によりて或は一箇の事を

[illegible]

いふに、菅達ひなり、若比敵山の、実信正、子、御、至、食
の、四、侍、い、ま、ま、け、け、子、速、車、を、乞、せ、れ、く、ま、り、一、の、ふ
白、河、の、思、い、乞、食、を、見、へ、く、麻、く、お、外、に、れ、く、ま、ま、ま、ま、の
敵、実、信、の、車、より、お、下、り、て、彼、乞、食、の、病、と、尋、り、入、信、車、の
人、く、尋、り、ま、林、の、裏、へ、送、り、い、ま、へ、り、早、く、車、に、お、ま、れ、と、い、れ、
ハ、信、を、神、と、振、切、く、い、や、く、お、く、ら、け、万、全、の、計、を、の、願、う、い、
各、醫、曲、藥、を、お、給、ま、り、ま、り、亦、何、ま、り、い、い、つ、ま、の、ま、れ、各、降、頭、
神、も、も、証、を、お、ま、り、ま、り、ま、り、病、人、を、我、を、て、治、り、
着、病、と、い、つ、ま、い、思、信、ま、り、早、く、平、安、に、思、へ、ま、り、縁、く、い、つ、く、
救、急、と、い、つ、ま、い、乞、食、く、向、い、我、く、い、つ、ま、り、ま、ま、は、て
も、ま、ま、い、ま、と、縁、く、い、て、救、つ、ま、い、と、大、意、ま、の、後、へ、乞、食、
取、と、い、ま、け、い、ま、い、縁、を、お、ま、り、ま、り、い、つ、ま、い、信、け、の

湯、法、幸、に、得、く、と、い、け、ま、い、信、ふ、く、と、我、く、縁、を、い、ま、い、
縁、を、治、り、ま、い、乞、食、く、向、い、大、威、徳、明、王、の、秘、法、と、縁、く、て
ま、信、車、に、お、ま、ま、り、ま、り、い、ま、い、文、亨、釋、書、も、明、く、わ、り、
ま、い、て、ま、ま、い、武、士、の、縁、を、治、り、ま、り、い、ま、い、初、め、の、ま、い、日、以、ま、い、
似、と、縁、を、い、ま、い、と、責、め、れ、て、致、物、い、ま、ま、り、ま、い、と、縁、く、い、
い、ま、い、氏、の、妻、女、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
骨、の、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
石、を、お、ま、い、浪、人、や、れ、く、ま、い、ま、い、致、物、お、給、ま、い、と、見、え、や、い、
通、ま、い、志、を、お、ま、い、

様々とお出でて我身が有りたけ様と云ふ（右連下れ）
 我々も此色にあらうとて、はやくお女を限るは女の形を
 着けりつゝ、因に急ぎ、あててやう。然るも此身不喜へ
 う。親を力く、急ぎ、速きりけとて、同じく、如き
 御りありとて、散まを捨り、身の上は石室の古物様
 して、四六背り、それとて、云はるゝ、あそ、害とて、感して、身
 後、牛、ぬ、後、古物、利、整、て、貴、原、と、改、く、桂、川、の
 邊、草、中、と、云、里、（閑、居、）た、う、古、へ、と、出、る、も、か、か、と、
 同、と、後、と、て、望、我、の、牧、王、牧、女、也、と、能、能、似、そ、う、

松平肥前守忠根妻

一、よ幾代も養ひておしやせん。我々の方へなまけり。呉井
は漢人を將軍家治公元文二丁巳年正月廿日御誕生ありし
より四乳母と申されけり。竹久代君といふ所名ふれり。佐一
中よりまう。吾なり。一よりく千代と名をきる也。そののち幾
の家流の中より御といふべし。男の方へなまけり。四乳母の
なまけり。あつた山形南にさかすにあそびたり。とのこと。

在東田宅月
九重

我思ふに所ありて爲の月や即ち此をふりて

三條をふくむと云ふは西田の如く

春の夜の長も経るぬ世の中に只やまのうとて田鶴啼海を
是より潮く國母の川流より能くけり三昇皆是衆生悉
是吾も也と釋るれ金言とふ世の中れ人と一切子れと
よめ辰とわぬ世の中公の月四日卯へあつてきてあつて
の一夜の鶴の子とあつてける中公のうとて能
くけりまのうとて能くける春の例へるうとて

弟而書

宗通

季吟

此年あらまや一年ぬるの筆の款

は季吟宗通をゆふ和信のれ芭蕉桃青の贈也
極楽の辛苦のうとて及種ありれわより苗代田
千工唐真小樹儀よりうとて諸國へよりあつて能く
わくわく水とてあつて入梵とてあつて能く
腹中に入るを種ありより人のうとてあつて能く
より是迄百姓の働けるうとてあつて能く
といふその食のまゝいふ能の月一日もなくてまづ一圓の
よめ民なり民のえを合れり食のうとてあつて能く
國神と海をより能くも人あつて億兆のうとてあつて能く
是と海をより能くも人あつて億兆のうとてあつて能く
は季吟宗通をゆふ和信のれ芭蕉桃青の贈也

42660

